

令和 5 年 5 月 23 日現在

機関番号：27101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04185

研究課題名(和文) 医療の介入を受けた身体のライフコース研究 性分化疾患当事者の経験

研究課題名(英文) Medical Intervention to Body: the Life Course Study of Intersex

研究代表者

入江 恵子 (IRIE, KEIKO)

北九州市立大学・文学部・准教授

研究者番号：10636690

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：性分化疾患/インターセックス当事者の経験について、特に医療の介入が及ぼす影響について明らかにした。具体的には、社会学における逸脱論の観点、医療社会学における医療化と身体論の観点、ジェンダー論の観点から、医療による身体への介入の結果としての「逸脱増幅」が個人のライフコースに影響を与えていることを明らかにした。また、研究成果を著書『介入と逸脱 インターセックスと薬害HIVの医療社会学』（晃洋書房）にまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

インターセックス当事者のライフコースを多様な論点によって分析することは、当事者の経験の複層性を明らかにするだけでなく、その具体的内容と過程を明らかにするものである。このようにして得られた結果は、社会において「逸脱」と認定され、「逸脱」として扱われることの影響、そしてその「逸脱」を自ら定義しなおし、周囲の社会と相互行為を行うために一部内面化して生きることである。逸脱者の<逸脱・身体・ジェンダー観>をめぐるダイナミクスを明らかにすることは、同じようなケースへ示唆を与えるだけでなく、隣接領域である医療社会学やマイノリティ研究へも新たな視座を提供することができると思う。

研究成果の概要(英文)：The study clarified the experiences of Intersex/DSD (Disorders of Sex Development), particularly with regard to the impact of medical intervention. Specifically, from the perspective of deviance theory in sociology, medicalization and the body in medical sociology, and gender theory, I found that "deviance amplification" as a result of medical intervention on the body affects the life course of individuals.

研究分野：社会学

キーワード：性分化疾患 インターセックス

1. 研究開始当初の背景

インターセックス当事者にとって、自分の身体は常に医療という他者によって定義され、変更を加えられてきたものである (Chase, 1998)。そのような状態にある個人にとって、身体とはいったいどのようなものなのだろうか。これまでのインターセックスについての研究は、医療や医学の見地からその処置内容や診断についてなされてきたものがほとんどである。社会学や文化人類学などをはじめとした文化的・社会的な研究としては、当事者の経験から主にインターセックス治療や医療のあり方を問うたチェイス、歴史的アプローチでインターセックス治療の位置づけを試みたドレガー、社会学的視点から、運動論とアイデンティティ論を用いてインターセックス当事者の自己受容のプロセスを明らかにしたプリーブスの研究などがある (Chase, 1998, Dreger, 1998, Preves, 2003)。しかし、特に個人の経験を社会に位置づけて論じられたものは未だない。こうした現状に反して、インターセックスを生きる個人の身体は、社会の文脈と無関係というわけでは決してない。

そこで本研究では、当事者の経験のうち特に医療による身体への介入を通じたもの、いわば逸脱状態がさらに増幅されるケースである「逸脱増幅」が当事者の生活世界にどのように影響しているのかを明らかにする必要があると考えた。

<参考文献>

Chase, Cheryl, 1998, "Surgical Progress Is Not the Answer to Intersexuality." *Journal of Clinical Ethics* 9(4): 385-392.

Dreger, Alice Domurat, 1998, *Hermaphrodites and the Medical Invention of Sex*. Harvard University Press.

Preves, Sharon E., 2003, *Intersex and Identity: the Contested Self*. Rutgers University Press.

2. 研究の目的

本研究は、当事者の経験と人生観の変化、そして問題の所在を明らかにするために、ライフコース論を軸として当事者の語りを分析するものである。具体的な分析理論として、既存のライフコース論に、逸脱研究の視点と医療社会学的視点、ジェンダーの視点を取り入れ、包括的視点を創造するものである。

逸脱論：「逸脱」者のライフコース研究は、Sampson (1990、1992 など)らによってなされている。具体的には、主に Elder (1987) のライフコース論の定義を引用し、幼少期に犯罪を犯すなどしたものが老年期をどのように迎えているかという追跡調査である。本研究も Elder のライフコース論を援用し、逸脱の視点を盛り込む点では一致している。しかしながら先行研究では、「逸脱」の中でも特に犯罪という「行為」に焦点があてられており、主に調査対象者らの能動的な行為を取り上げるにとどまっている。本研究ではむしろ受動的な経験、つまり周囲の社会からラベルを貼られる経験と、スティグマを受けることとライフコースへの影響に焦点をあてる。

医療化と身体論：個人レベルでの「医療化」はこれまでの医療社会学などでは扱われてこなかった。それは、個人による医療という専門家によって支配された情報の獲得と強制のプロセスである。当事者の経験をより包括的に理解するためには、ミクロな医療化の側面 身体経験と、当事者と医療従事者との間で繰り返される「逸脱」の追体験 に焦点をあてる必要がある。

ジェンダー論：性分化疾患とジェンダーをめぐる言説には2つの潮流がある。ひとつは、「性分化疾患をジェンダーの問題としてとらえるべきではない」という当事者らによる主張である (Jermon, 2011 など)。もうひとつは、女性学やジェンダー学における言説で、性別二元論の正当性を覆す根拠として性分化疾患 (当時の文脈では「インターセックス」とも) の存在を扱うものである (Butler, 2005 など)。

確かに、性分化疾患の問題は医療に起因するところが大きく、ジェンダーの問題としてのみとらえてしまえば、当事者の「苦悩」のほとんどをとりこぼしてしまうことになる。しかしながら強固な男女二元論を有す社会においては、当事者らは一度は自らの身体状態やアイデンティティ (特に性自認) をジェンダーの文脈から捉えたり、他者に説明することを強要される。それゆえ、「ジェンダー」の視点を取り入れ、アイデンティティとの関連を明らかにする必要がある。

3. 研究の方法

個人のライフコースを明らかにするために聞き取り調査を行った。聞き取りに要した時間はおよそ1人あたり1回2時間程度で、多い場合は1人あたり3回行った。しかしながら、研究代表者の育休取得と、新型コロナ感染状況から当初予定していた計画からは大幅に変更し、多くの聞き取り調査が行うことが不可能となった。そのため、インターネット上で開かれるオンラインミーティング、学会、その他集まりに参加し、情報を収集することに切り替えた。

また、データを分析するための視座を確立するために以下の3つの視点を取り入れた。それら

は、社会統制とラベリングの影響を明らかにする〈逸脱論〉、医療の介入とその身体経験を明らかにする〈医療化と身体論〉、社会規範に対する反作用としての当事者のジェンダー観の変容を明らかにする〈ジェンダー論〉である。これらの視点を取り入れ、インターセックス当事者のライフコースを捉えるための理論的構築を行った。

4．研究成果

性分化疾患の当事者運動と生活世界の変化について、聞き取り調査とフィールド調査の結果から以下の3つの点を明らかにした。当事者の「痛み」をめぐる身体経験について、身体の3つの位相からなる構造を明らかにした。また、当事者運動と当事者との関連については、その運動のあり方は状況の定義と共に変化していることを明らかにした。具体的には、当事者(運動)にとって、働きかける対象であった医療が「敵」から「協力者」に変化し、それに伴い、当事者運動が多様化したことを明らかにした。また、運動にかかわる当事者の多様化の契機としての、名称変更については、当事者の反応としてアメリカ、日本、ヨーロッパとそれぞれに異なった傾向があることを明らかにした。

次に、さらに当事者の社会的世界を明らかにするために、家族関係と社会運動へのかかわりを明らかにした。その後、医療によってその「逸脱」が増幅された当事者が、医療制度にまで影響を与えながら、家族関係と社会運動とのかかわりを通じてどのような社会的世界を構築しているのかについて、ダイナミックな図式として展開しながら明らかにした。理論の精緻化をはかるとともに、同じく2つのケースの当事者への聞き取り調査から、医師 患者関係、家族との関係を明らかにした。

理論的研究においては、これまでの聞き取り調査から導き出した、当事者の身体の内作用の概念図をさらに理論的に位置付け、意義の明確化を行った。特に、逸脱論と近接する理論からこの概念図の特質・意義を再考し、概念の精緻化を行った。具体的には、シンボリック相互作用論における議論、構築主義的アプローチ、身体論との比較を行い、理論構築に取り組んだ。結果として、当事者のライフコースには、性分化疾患/インターセックスとして医療処置を受けたことが決定的な影響をもたらしていることがわかった。

また、コロナ禍により変更が生じたことにより、当初の聞き取り調査の多くが実施できなかった。しかしながらオンライン上で当事者らと交流を続けることができた。その結果、今後の課題として、コロナ禍により当事者の生活世界に生じた変化を明らかにする必要があることがわかった。特に社会運動にかかわる当事者らからは、医療とのかかわりと孤立の問題がしばしばあがっていた。オンラインミーティングの開催など、ネットワーキングにも変化があったことが示唆されているがこれも当事者の生活世界の変化を明らかにするために今後の調査課題とする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 Keiko Irie
2. 発表標題 Modern Yoga in Japan
3. 学会等名 AAS2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Keiko Irie
2. 発表標題 The Generation Gap among Patients' Narratives: HIV Infection due to Tainted Blood Products in Japan
3. 学会等名 AAS2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山田富秋、早坂典生、橋本謙、種田博之、入江恵子、小川良子、宮本哲雄
2. 発表標題 血友病薬害HIV感染被害者に対する 社会心理的支援
3. 学会等名 第35回日本エイズ学会学術集会・総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Keiko Irie
2. 発表標題 Nomenclature Conflict: Intersex Community in Japan
3. 学会等名 PSA (Pacific Sociological Association) 92nd Annual Conferenc (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山田富秋、早川典生、橋本謙、 種田博之、小川良子、入江恵子 、 宮本哲雄
2. 発表標題 「薬害被害者の「感染」の心理社会的意味」
3. 学会等名 第34回日本エイズ学会学術集会・総会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Keiko Irie
2. 発表標題 Modern Yoga in Japan: Feminization, Consumer Culture, Fashion, Medicine, and Spirituality.
3. 学会等名 Japan Studies Association (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 入江恵子
2. 発表標題 インターセックス / DSDの現状と課題ー名称変更とフィードバック
3. 学会等名 奈良女子大学社会学研究会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Keiko Irie
2. 発表標題 comparative study of the feedback to the nomenclature change of Intersex to DSD (Disorders of Sex Development)
3. 学会等名 Pacific Sociological Association (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Keiko Irie
2. 発表標題 The structure of Intersex/DSD Discourse in Japan
3. 学会等名 EuroPSI (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 入江恵子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 242
3. 書名 介入と逸脱 インターセックスと薬害HIVの医療社会学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------